特定非営利活動法人CATiC

2014年度年次報告書

2014 CATiC Annual Report

代表メッセージ

　2012年夏。派遣の事務員の仕事をしていたときのことでした。「カンボジアに映画館をつくりたい」という言葉が降ってきたのです。
　カンボジアに行ったこともなかったので、まずはカンボジアに行ったことのある人に話を聞こうと思った中に旅好きの石川幸佑(現副代表）がおりました。社会人勉強会仲間だった石川に、ミーティング中「カンボジアに映画館をつくりたいんです」と書いた紙ナプキンを差し出しました。石川が「いい夢持ってんじゃん」と言ったとき、「カンボジアに映画館をつくろう!プロジェクト」(後に団体名CATiCと命名）がスタートしたのでした。
　3カ月後には、石川と、当時大学生だった五百蔵直樹、友人の映像作家と4人でカンボジアで上映会を実施。その時映画を観に来てくれた子どもたちの顔が忘れられず、この映画配達を一生続けることを決意したのでした。
　始めは映画館を建設しようと思っていましたが、より多くの子どもたちに映画を届けるためには、映画館ひとつ作るよりも、子どもたちに自分たちで届けに行った方がいい。それに気付いてから、「カンボジアに映画館をつくろう!」プロジェクトは、農村部の村にプロジェクターやスクリーンを持ち込み、教室や村の広場を映画館に変える、移動映画館キャラバンとなりました。
　最初の1年は、何もかも手探りで、正しい活動なのか自信がなく。2年目は仲間も増えて、応援してくださる方も少しずつ増えてきて。 そして2014年度は、手前味噌ではありますが、CATiCが今後広がっていくことを確信した年になりました。漫画家の方が「キャラクターが勝手に動き出す」と言うことがありますが、CATiCにそれを感じたような気がしました。
　しかしながら、2014年度は一度もカンボジアに行くことができませんでした。映画配達できないことをもどかしく情けなく思いながらも、カンボジアに行けない時は日本でできることを頑張らねばと思い、映画コンテンツ発掘と広報、そして映画配達委託の3つに力を入れることにしました。
　『劇場版ゆうとくんがいく』のクメール語吹き替え版を作成。プレゼン大会で優勝し、多数のメディアに取り上げていただくという結果を出すことができました。そして映画配達委託第1号の成功。
　また、2014年12月24日に正式にNPO法人化することもできました。2014年度の様々な活動は、2015年度にカンボジアに映画を届ける活動を大きく飛躍させるための種まきでもありました。
2015年度、「生まれ育った環境に関係なく、子どもたちが夢を持ち人生を切り開ける世界をつくる」のミッションに向かい、団体一同邁進してまいります。

プロフィール
教来石小織（きょうらいせきさおり）

特定非営利活動法人CATiC（Create A Theater in Cambodia:キャティック）理事長
1981年生まれ。日本大学芸術学部映画学科卒業。小学生の頃から映画監督を志し、大学では映画制作について学ぶ。在学中に途上国の村にホームステイし、途上国の子ども達への思い入れを強くすると同時に、「途上国の電気がない村に映画館をつくりたい」という夢を抱く。
31才になって人生を見直した際、改めて、映画を観られる環境にいない子ども達に、映画で夢を贈りたいと考える。2012年よりカンボジア農村部の小学校をまわる移動映画館を実施。

CATiCとは

【特定非営利活動法人CATiC(Create A Theater in Cambodia)】

「カンボジアに映画館をつくろう!」プロジェクト実施団体。上映の許諾を得た日本のアニメ映画をクメール語に吹替え、カンボジアの電気がない地域に住む子どもたちへ届けている。上映機材と発電機を持ち込み会場を設営し、映画を通じて子ども達に夢を届ける「移動映画館」事業を主に行う。
ミッションは、「生まれ育った環境に関係なく、子どもたちが夢を持って自分の人生を切り拓ける世界をつくる」

～CATiC年表～

- 2012年 9月 任意団体CATiC設立
- 2012年11月 カンボジアシェムリアップ州2か所で移動映画館実施
- 2012年 4月 やなせたかし先生原作『ハルのふえ』の上映権を獲得
- 2012年6月 『ハルのふえ』をクメール語吹替え版完成
- 2013年5月 日カンボジア友好60周年記念事業・日ASEAN40周年事業に認定
- 2013年7月 シェムリアップ州の4カ所の村で移動映画館。
  映画の後に、映画の題材でもあるフルートのワークショップを行う。
- 2013年9月 日本の映画館を貸し切ってイベントを実施
- 2014年3月 シェムリアップ州5カ所の村で移動映画館
- 2014年10月 『劇場版ゆうとくんがいく』の上映権を獲得
- 2014年11月 J-LOPの助成金を得る
- 2014年12月 特定非営利活動法人に認定
- 2015年 1月 『劇場版ゆうとくんがいく』クメール語版吹替え版完成
- 2015年 1月 横河オークン会様によりノウハウと機材を渡し届けてもらう映画配達委託成功
- 2015年2月「みんなの夢アワード5」にて、日本武道館で8000人の観衆、60社以上の企業の前で本活動のプレゼンを実施。優勝

～メディア掲載実績～

オンライン:「オルタナS」,「アナザーライフ」「グローバルニュースアジア」「サッカーキング」
オンライン提携サイト:「Yahoo!ニュース」「exciteニュース」「Infoseekニュース」「@niftyニュース」他
雑誌:「オルタナ」
新聞:「日本大学新聞」
テレビ:日本テレビ「NEWSZERO」
ラジオ:ニッポン放送「渡邉美樹 5年後の夢を語ろう!」

みんなの夢アワード

CATiCの夢がみんなの夢に

2014年度の一番大きな出来事は、「みんなの夢アワード5」でのグランプリ獲得でした。530名以上がエントリーした本大会。3次審査を通過した7名のファイナリストは、2015年2月23日、日本武道館で延べ8000人以上の観客と60社以上の企業の前でプレゼンを行い、優勝者には最大2000万円分の支援が贈られるという、まさに夢のような大会でした。

ダメ元でエントリーしたのですが、二次審査を通過してからは、ファイナリストに残りたいという欲が出てきました。三次審査に向けてメンバーと徹夜で提出物の事業計画書を書いたりと全力投球。まさかのファイナリストに残ってから本番までの約3カ月、プレッシャーに押しつぶされそうな日々を過ごしてきました。

8分間のスピーチで2000万。これがあれば、事業を飛躍させることができる.....。舞台に立つ私だけでなく、メンバー全員がCATiCの他にやるべきことを一時停止して、このスピーチに賭けたのでした。メンバーの期待を背負うのは嬉しいけれど辛かった。何度も吐きそうになりました。

メンバー側と夢アワード側から求められていることが違うことに混乱したり、「プレゼンでは映画を届けるじゃなくて映画制作したいと発表する」と迷走し、「俺たちは映画制作がしたくて入ったんじゃない!届けるためだ!」とミーティングで詰められたり。スピーチ原稿は当日の本番直前まで書き直し続けました。スピーチは毎回ボロボロに言われて誰ひとり褒めてくれないし、人生で初めてお酒に逃げるということを覚えたりしました。「今私に必要なのは自信です。褒めて自信を与えてくれないなら、一人で練習します」とやけくそのメールを送り、スピーチ練習から逃亡したこともありました。

皆に声が小さいと怒られ、「君の声は致命的だ」「武道館の端まで届かない」と夢アワードの演出家さんにも指摘され（当日のリハーサルでも声が小さい注意されていました）。本番は大きな声を出さねばと思ったけれど、気付けば小さい声になっていました。

後から、会場票のおかげでグランプリになったことを知りました。小さな声に耳を澄ませて聞いてくださった会場の皆様に心から御礼を申し上げます。

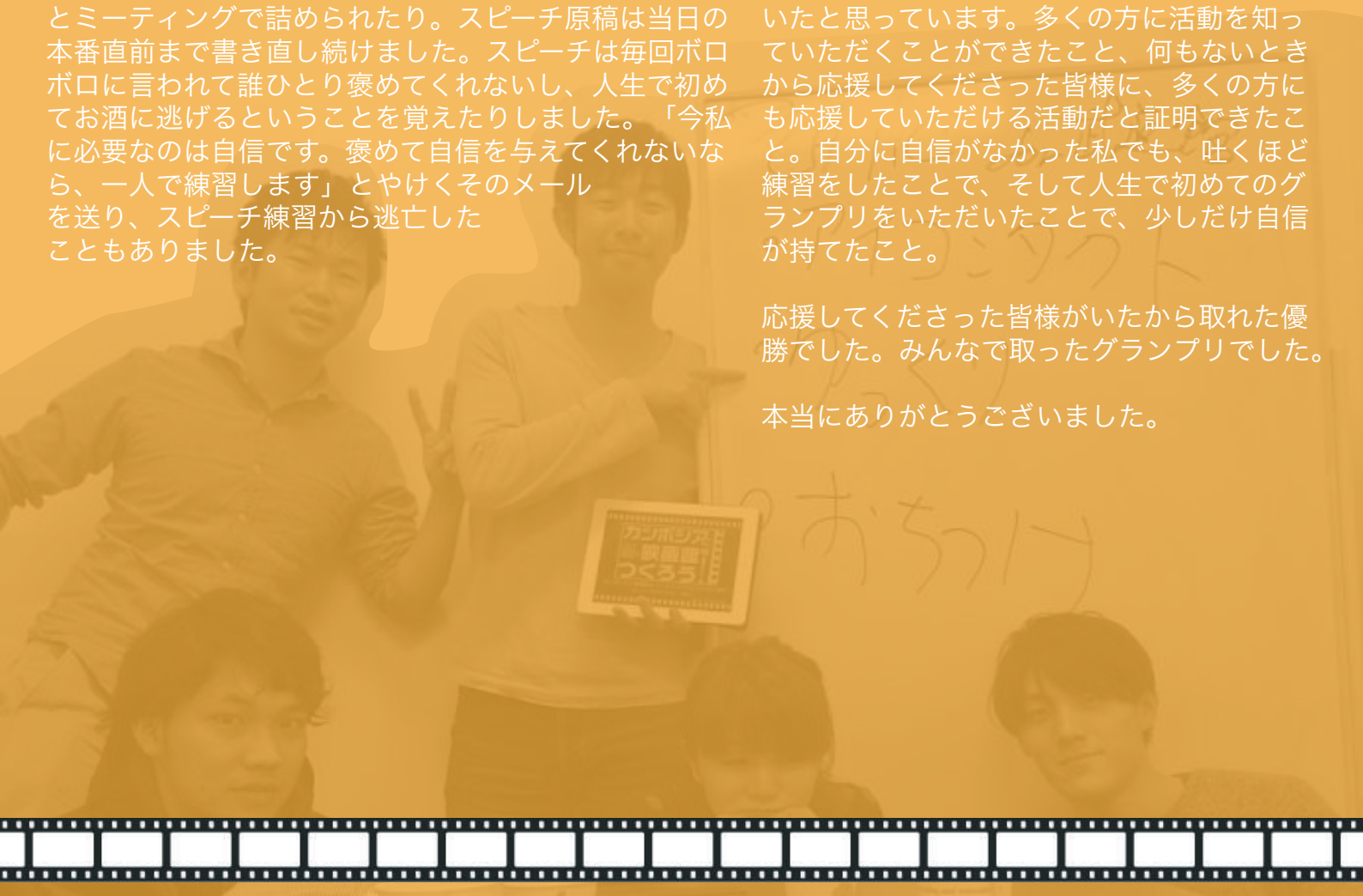
応援席にはメンバーや、いつも応援してくださる皆様、お世話になっている皆様など大切な方たちが来てくださっていて、優勝が決まった時には涙を流してくださっていたと聞いて泣きそうになりました。

恥ずかしながら、私始めメンバー一同賞金だと勘違いしていた2000万円分の支援は出資か融資。
経済的に持続性のある事業にいただけるもの。どのような事業にすればいいのか、多くの方にアドバイスをいただきながらも、2015年5月現在、ご支援に関する方向性は未だ決まっておりません。

ただすでに、2000万円以上のものをいただいたと思っています。多くの方に活動を知っていただくことができたこと、何もないときから応援してくださった皆様に、多くの方にも応援していただける活動だと証明できたこと。自分に自信がなかった私でも、吐くほど練習をしたことで、そして人生で初めてのグランプリをいただいたことで、少しだけ自信が持てたこと。

応援してくださった皆様がいたから取れた優勝でした。みんなで取ったグランプリでした。

本当にありがとうございました。



本番スピーチ全文

私には、お金も権力も、特別な才能もありません。一人暮らししている6畳のアパートには、テレビと洗濯機がありません。でも、夢があります。
私の夢は、生まれ育った環境に関係なく、子どもたちが夢を持ち人生を切り拓ける世界をつくることです。そのために、カンボジアの農村部に映画を届ける映画配達人を100人生み出したいと考えています。いろんな人に聞かれました。なぜ、映画なの?途上国には映画より先に届けるものがあるんじゃないの?確かに映画は、食糧やワクチンのように、生きる上で絶対に必要なものではありません。
でも、皆さんにとって、映画ってどんな存在でしょうか?私にとっては、子どもの頃から、夢や生きる目的を与えてくれるものでした。たとえばシンデレラを観たらお姫様になりたいと思ったり、007を観たら、スパイになるために勉強しようと思いました。こんなに夢を与えてくれる映画ってすごい。私も夢を贈る側になりたい。将来は映画監督になりたい。そう思ったのが小学6年生の時です。迷うことなく大学は、映画を勉強できるところに進みました。大学3年生のとき、新しい夢ができます。
途上国の村にホームステイして、ドキュメンタリーを撮っていたときのことでした。仲良くなった村の子どもたちに、「将来の夢はなんですか?」と聞いてみたんです。そしたらみんな答えられないか、先生とばかり答えるんです。日本の子どもたちに聞いたら、もっとたくさんの夢が返ってくるのに不思議だなと思いました。そうか。電気のないこの村には、テレビも映画館もない。だから将来の夢を聞かれても、身近な大人の姿からでしか思い浮かべることができないのかもしれない。知らない夢は、思い描くことができません。でも、この世で子どもの可能性ほど、大切なものがあるでしょうか。もしもこの村に映画館があったら、子どもたちはどんな夢を描くのだろう。いつか途上国に、映画館をつくりたい。それが私の、もう一つの夢になりました。でも当時、その夢に対し、一歩を踏み出すことはありませんでした。映画監督になる夢にも挫折して、私は映画から離れました。
そして、10年が経ちました。私は派遣社員の事務員として、夢のことなんて忘れて生活していました。結婚に失敗したり、癌の検査に引っ掛かったことをきっかけに、考えたんです。私は自分の人生で、何をしたかったんだろう。浮かんだのは10年前の途上国の子どもたちの顔でした。途上国の子どもたちに映画を届けたい。気付いたら、カンボジア行きのチケットを買っていました。カンボジアは1970年代半ば、100万人以上が虐殺された国。その時に映画文化も一度ほろびました。そんなカンボジアの子ども達に映画を届けたい。しかしながら、チケットを買ったはいいものの、何もかも手探りの状態で、何から始めたらいいかわかりませんでした。突撃で企業の方に電話して、「もしもし、私カンボジアに映画館をつくりたい者なんですが」と言っては不審がられたり。「もういいや、いってしまえ」とカンボジアの学校にいきました。そして、友達に借りたプロジェクターと、私のベッドのシーツで作ったスクリーンと、村で借りた発電機で、即席の映画館をつくりました持っていった映画は、やなせたかし先生原作のハルのふえ。森でタヌキに育てられた男の子が、音楽家になる夢を叶えるお話です。子どもたちの夢の選択肢が広がって、そして人生を切り拓く力を教えてくれるような映画を選びました。上映権を得て、現地のカンボジア人の声優さんに吹替え版を作っていただきました。準備は整ったのですが、私の一方的な想いで始めたことだったので、子どもたちに受け入れてもらえるか不安でした。そしたら子どもたちは、こんな顔で映画を見てくれんたんです。タヌキのお母さんの行動に、お腹を抱えて笑ったり、お母さんと少年が別れるシーンでは、ボロボロと涙をこぼしたり。最後には拍手をしてくれました。この光景を見た時、私はこの活動を一生続けようと決意しました。なぜなら初めてだったんです。私の人生で、こんなにもたくさんの人たちに喜んでもらえたのは。誰かに何かをしたくてカンボジアに行ったのに、逆に幸せや生きる希望をもらったのは、私の方でした。一緒に、夢を追ってくれる仲間ができました。現在は20名のNPOとして活動しています。私たちは延べ11カ所の村を回り、1200人の子ども達に映画を届けてきました。その中に、忘れらない女の子がいます。大人たちが、タイに出稼ぎに行く村で暮らしているピーちゃん。ピーちゃんは将来の夢を聞いたとき、先生になりたいと言っていました。でも、映画を観たあと、こんなことを言ったんです。「夢が変わりました。私は、映画をつくる人になりたいです」その瞬間、私は、この活動は、夢の種まきなんだと思いました。カンボジア中に、様々な映画を届けて、夢の種をまきたい。カンボジアの人口は1500万人。そのうち未来を担う子どもたちは600万人。私たちだけでは、限界があります。そこで私たちは、私たち以外にも映画を届けてくれる映画配達人を増やしたいと思いました。カンボジアに10年支援をしてらっしゃる70歳の男性が、私たちのことを聞いて、映画配達人に名乗り出てくださいました。カンボジア人のスタッフも、映画を届ける仕事は楽しいと言ってくれました。もしもカンボジア中に、夢の種をまくことができたら。カンボジアののどかな農村部で、映画を楽しみに待ってくれている子どもたちの中から、もしかしたら将来、世界中を感動させる音楽家が出てくるかもしれない。世界一のサッカー選手が出てくるかもしれない。映画配達人の数だけ、映画の上映機材が必要です。もっとたくさんの映画コンテンツが必要です。映画の数だけ、夢の数が増えるんです。皆様、どうか、私たちと一緒に夢の種まきをしてくださいませんか？
今日私の夢の話を聞いてくださった皆様、今日まで支えてくださった皆様、そして、今日ここまで連れてきてくれた夢に、ありがとうございました。

CATiC Special Interview　2014

甲　斐　秀　幸　さ　ま　イ　ン　タ　ビ　ュ　ー

上映に込める想いには「ひとりでも多くの人に観て、共感して、感動してもらいたい！」という様な、とても強い「映画愛」があると感じます。

CATiC Special Interview2014でインタビューさせていただくのは、映画配給を手掛けていらっしゃる株式会社新日本映画社の甲斐社長。
この方なくしてCATiCは始まらなかったと言っても過言ではありません。代表・教来石が上映権のことを聞きたいと、関係各所に片っ端から電話をして気持ち悪がられていたところ、唯一お話を聞いてくださったのが甲斐社長でした。『ハルのふえ』の上映権について制作会社にかけあってくださったり、その後も多大なるサポートをし、CATiCを導いてくださいました。甲斐さんに、当時の心境やCATiCを見ていて思うことについて伺いました。

ー初めて教来石から連絡が来たとき、どんな印象を受けましたか？

　小さな声でボソボソ話す人だなと思いました(笑）。ですが、非劇場配給をやっていると、いろいろな意味で「個性的な」方々から、様々な問い合わせやリクエストを頂くことも多いので、その点では、教来石さんもそういった「個性的な」方のひとりとして、自然に対応させてもらいました。最初は確か、カンボジアで『フラガール』（2006）を上映したいというお話で、本作は弊社が国内配給をしている作品なので、海外での配給権を扱うセールス会社の名前と連絡先をお伝えしました。
これでこの案件は一件落着と思いきや、「それはそれとして、ぜひ一度お会いしたい!」と教来石さんが半ば押しかける様に事務所へやってきたので、何だろう？何でこの人はこんなに必死なんだろう？　この人はきっと何かあるなと思いました。

ーそんな教来石の夢をサポートしてくださったのは何故でしょうか？

　かわいそうな感じがしたから？（笑）　それは冗談ですが、事務所で最初にお会いした時の印象も、やはり小さな声でボソボソ話す人だなと思いました（笑）。しかし、とても熱心に「電気も通わないカンボジア農村部の子どもたちに、映画を届けたいんです！」という想いを語る、やはり小さな瞳（笑）の奥に、退路を断った決心というか、強い意志の塊の様なものが見えた気がしたからだと思います。と、同時にこの人が思い描く壮大なプロジェクトは、自分をはじめ多くの人たちのサポートが必要だとすぐに気づきました。
「この人はきっと天性のカリスマタイプなんだろう。具体的な実務は誰かがやらなければ…」と。
そしてよくよくプロジェクトのコンセプトを聞いてみると、「映画を観たことのないカンボジアの子どもたちでもわかりやすい、例えばディズニーとかジブリのアニメ映画とかを観せたい。」ということが分かったので、当時ちょうど弊社が国内非劇場配給をスタートさせていた、やなせたかし先生原作のアニメ映画『ハルのふえ』がぴったりではないかとお薦めしたのです。

ーカンボジアの子どもたちに見せるために『ハルのふえ』の上映権を取るのは前例のないことだったと思います。あの時CATiCには言えなかったかれど、実は苦労されていたことはありますか？

　『ハルのふえ』に限らず、そもそも日本映画をカンボジアで上映する為の権利取得交渉をすること自体が、私自身初めてでしたが、こちらからお薦めした作品なのに「ごめんなさい、上映権が取れませんでした。」と敗走して帰るのもカッコ悪いし嫌だったので、そこは絶対何とかしてやろうと思いました。…が、『ハルのふえ』の海外セールス権利元が、その制作会社であるトムス・エンタテインメントさんであることが判明し、版権管理の厳しいメジャーアニメ制作会社さんとの交渉に緊張もしましたが、いつもの仕事の交渉ごとではなく、CATiCの想いを背負って交渉をしているんだと思うと、自然と言葉に力が加わり、きっと説得力も増したのでしょう。
トムスさんの共感を得て、契約書を取り交わすまでさほど時間はかかりませんでした。

ー甲斐さんが非劇場配給に力を入れているのはなぜですか？

　映画配給の仕事をしている以上、劇場(映画館)へしっかりと映画を届けて上映してもらうというのは、もちろん重要な業務です。だからといって学校や公共施設などを会場とした非劇場の上映が二の次で良いという考えは、配給会社の奢り、もしくは怠慢だと思います。
劇場の方々も、もちろん「映画愛」を持って、日々興行の業務をこなされていますが、次から次へと新作がやってきて、短期間で次の作品に切り替わっていく近年の興行スタイルの中では、1本1本の作品にその都度100%想いを込めて取り組んでいく、ということは、物理的に出来ない現実があります。

一方、非劇場の上映を企画される主催者の方々が、その日のその1本、1回きりの上映に込める想いには、まるで自分が監督した映画を「ひとりでも多くの人に観て、共感して、感動してもらいたい！」という様な、とても強い「映画愛」があると感じます。弊社は中学や高校の学校上映会をプロデュースしているので、上映前にはかったるそうにしていた生徒さんたちの表情が、上映後には高潮して、興奮して友達や先生と話している現場を知っています。この現場に立ち会える感動は、劇場から日々送られてくる動員報告書の数字を眺めているだけでは得られないものです。とはいえ、劇場興行と比べると、非劇場上映の段取りをつけるのは、結構手間がかかるものだし、「興行の邪魔をするな」と劇場さんからは白い目で見られることもたまにあります。でもその手間を面倒だからといって受け付けなかったり劇場さんに対し過度に遠慮して、本来劇場興行に支障のないはずの非劇場上映の機会を潰したりするのは、映画配給業本来の使命を見失った、残念な行為だと思いますね。

ーCATiCの活動は、テレビやインターネット環境が普及したら必要なくなると言われています。しかしながら、テレビやネットが普及している日本でも、みんなで映画を観る文化が消えないのはなぜでしょうか？

映画の中身だけを見る（確認する）だけであれば、テレビやネットだけで十分だし、その方が便利でしょう。それでも劇場や非劇場で、みんなで集まって映画を観る文化が無くならないのはなぜか？　それは単純にみんな「みんなで集まって映画を観るのが好きだから」なのだと思います。みんなで集まって映画を観ている、その特別な空間にいることが好きなのかも知れません。ブザーが鳴って、おしゃべりが止んで、ゆっくりと照明が落ちて、やがて大きなスクリーンに光が点る。これからはじまる物語の世界に、ここにいる全ての人たちと同時に足を踏み入れる。悲しいドラマに溜め息をつくだろうか？　それともお腹が痛くなる程笑うかも？　残酷なシーンに目を逸らすかな？最後には大きな感動に包まれて、熱い涙がこぼれるんだろう。そんなひとつひとつのリアクションを、皆が同時にひとつの空間で濃密に体感できるのは、他の何ものにも代えられない「アトラクション」であるとも言えるでしょう。そう、ジェットコースターにみんなで乗る感じにも似てますよね？　これから始まるスリルを共有できるから、ドキドキ、ワクワクして楽しいですよね？一人でジェットコースターに乗っても、それは怖いだけでさほど楽しめないと思います。でも、どんなコースをどんな風に走る乗り物なのかは確認できるけど（笑）。テレビやネットで一人で映画を見るのは、この感覚に近いのかも知れませんね。

ー最後に、甲斐さんにとって、映画とは？

ひとことで言うと「最強の人生シミュレーター」ですかね。映画はそれまでの演劇や音楽、絵画などのアートを全て取り入れた「総合芸術」であると言われます。そういうと堅い感じがするけど、こんなにも誰かの人生を、まるで自分がその主人公となって、今まさに歩んでいるような疑似体験が出来る装置って、他には無いでしょう。同時に、そのリアルな疑似体験は、記録映画の様に何かの主義主張を訴える際にも、もちろん強力に作用するし、ご存知の様にドイツやソ連のみならずわが国でも、戦時中のプロパガンダに使用されたという反省もあります。そういう両刃の刃の側面も持つことも理解して、取り扱いには気をつけなければならないけれど、それでもやはり映画というのは素晴らしい芸術であり、装置であり、偉大な発明品だと思います。国籍や性別、年齢を問わず、誰もがいろんな人生を体験出来る。セレブな大富豪も、屈強なソルジャーも、宇宙人と交流する小学生も、愛する夫に看取られる老婦人も…。
CATiCがカンボジアの子ども達に映画を届けて、笑ったり、泣いたりしながら、子どもたちに気づいて欲しいことは、「自分には、選択できる人生がある」ということなのでしょう。たとえ宇宙飛行士にはなれなくても、宇宙飛行士という人生があるということを、映画という装置を使って知ることが出来るということは、とても大切なことだと思います。実際にプロサッカー選手になれるかどうかが重要なのではなくて、「プロサッカー選手になるぞ！」という夢、目的をもって歩みだす人生に価値があるのです。そうやって踏み出した人生は、もう昨日までのそれとはガラリと変わって、とてもキラキラとした、生きる力に満ち溢れたものになることでしょう。
そんなCATiCの活動に少しだけでも協力することが出来て、私自身の人生も、遅ればせながら少しだけキラキラした様な気がしています。

理事メッセージ

石川幸佑(Kosuke Ishikawa)
共同創設者・副理事長

「チームCATiCが動き出した」

CATiCの3年目は「チーム」の年度であったと感じています。1年目に応募した夢アワードでは、実績もなく夢を語るのみでしたが、3年目では優勝獲得。また、上映作品の翻訳料等の補助金への採択、NPO登記の完了、新たな上映作品の取得、委託によるカンボジアでの上映。これらは支援いただいている方をはじめ、活動を支えている一人ひとりのメンバーを含めた「チームCATiC」として動き出したことが多方面で実を結び始めた証ではないでしょうか。一方で、実るほど頭を垂れる稲穂でありつづける気持ちを大切にする団体でありたいと考えています。これからもご支援よろしくお願いします!

五百蔵直樹(Naoki Iorol)

「変化と積み重ね」

2014年度は、私にとってもCATiCにとっても、変化の年でした。私自身は学生から社会人になり、日々勉強の毎日でした。その中で、小さな積み重ねにより1年前と比べ、自分自身の変化を感じられてもいます。CATiCとしては、新たな上映権の獲得、メンバーの増加という変化だけでなく、気がつけば3年目を迎え、多くの方々に支えて頂きながら、NPO法人へと成長し、また新たなステージへと進む事が出来ました。2015年度は、これまでの積み重ねを元に、成果を残して参りたいと思いますので、よろしくお願い致します。

上村悠也(Yuya Kamimura)

「誠実に、だけどワクワクしながら」

活動を進めるためにどうしても必要なものが「資金調達(ファンドレイジング)」です。2014年度は目標通り、「会員制度の確立」「助成金・補助金の獲得」「企業様からのご支援金」を新たに達成することができました。しかし、本当に大切なことは、「どう資金調達するか」ではなく、「どう資金を使ってミッションを成し遂げるか」です。映画によって子どもたちの夢を広げるというご支援をいただけばいただくほど、根本理念を追求しながら、これから益々誠実に活動しなければと背筋が伸びる思いです。新しい1年を、皆様と一緒にワクワクしながら作っていけたらと思います。

冨塚拓(Taku Tomitsuka)

「一歩一歩を積み重ねていきたいと思います」

2014年度はミッション達成に向けて新たな一歩を踏み出した1年でした。今まで映画配達はCATiC単体で行ってきましたが、そこに限界を感じてもいました。そこで、CATiC以外の方のお力を借りて映画を届ける委託事業を立ち上げ、紆余曲折ありつつも年度末には委託第一号となる団体に映画を届けて頂きました。小さな一歩ではありますが、今後の可能性を感じることができた瞬間でした。2015年度は踏み出した一歩を着実に進めていきたいと思っております。今後ともよろしくお願い致します。

映画配達委託の成功

ミッション達成に向けて、カンボジア中の子どもたちに映画を届けたい。しかしながら、カンボジアの子どもの数は推定約600万人。全員に届けるのは、私たちだけでは限界があると感じていました。また、子どもたちに映画を届ける喜びを、私たち以外の方にも知っていただきたい。そこで、信用のおける団体様に上映機材とコンテンツを託し、上映を依頼させていただくことを考えました。
2015年1月。初めて私たち以外の団体様による映画配達が成功。宮澤宏さんが所属される横河オークン会様が映画を届けてくださいました。いつの頃からか、いつも私たちの活動を応援してくださり、温かく見守ってくださっていた宮澤さん。宮澤さんがこの事業の第一号飾ってくださったことを運命のように感じました。手探りで進める中、ご協力くださった宮澤様に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

～宮澤様メッセージ～
職場の先輩の同期会が定年を機に、カンボジア・コンポントム州にある小学校に新校舎を寄贈して寄贈式に代表団を送る話を聞き、定年後の2006年1月の訪問から参加させて頂き、以来10年間訪問を続けています。
小学校ではお絵描きの授業、運動会、5.6年生に1年おきの遠足、カレーライスの給食などを行っていますが、中でも日本の紙芝居を見せた時に身を乗り出して見ている子どもたちの姿には感動しました。
そんな時にCATiCの存在を知り、即座に飛び込み応援させていただきました。いつか私達の小学校にも映画を届けていただきたいと虎視眈々と狙っていましたので、映画配達委託の企画に、訪問団団長の了解を得る前に手を上げてしまいました(笑)。

CATiCがいつもお借りしている発電機が乾期の1月には空いておらず、毎年お世話になっている現地旅行会社のご協力で、何とか小学校の村から借りられる事になったものの、容量不足でプロジェクターを繋ぐとダウン。やむなく持参したノートPCでの上映となりました。大きなスクリーンで観せらなれないことを悔しく思いましたが、子どもたちは目を輝かせて映像に見入っていました。やって良かったと思った一瞬です。
上映後に子どもたちにどんな仕事を知っているかと聞いたところ、やはり先生と医者だけでした。「映画で見たようにみんなには知らないことがまだまだ沢山あるので、来年も映画を届けます。それまでは図書室の本を読んだり先生とお話ししたり、色々なことを学んでください。そして夢をいっぱい持ってください。」と話しましたら全員が大きな声で「ありがとう」と言ってくれました。

子供達に「夢の種を蒔く」という70歳の私の夢も育ちました。

CATiCさん、ありがとう!

～宮澤 宏さんのプロフィール～

1944年10月18日 東京は神田の生まれ。(申年・天秤座)
疎開したが、終戦後東京の杉並に移る。戦争の記憶のない「戦争を知らない子ども」です。

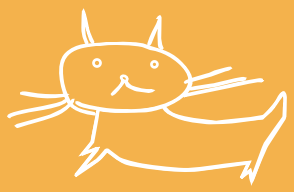
1960年4月に横河電機に入社。翌年都立小金井工高定時制に入学し勤労学生を4年間。

横河電機では製造に20年、その後は品質管理・品質保証を勤め上げ2005年3月定年となったが65歳まで働かせて頂き現在に至ります。

次はサッカーの種まきを

私たちが届ける映画の選定基準は、子どもたちが楽しんで観られること、夢の選択肢が広がること、夢の大切さを教えてくれること。
2014年度は、サッカーのアニメ映画『劇場版 ゆうとくんがいく』の上映権を株式会社白組様よりご提供いただき、クメール語吹替え版を作成しました。

【上映作品概要】
タイトル:劇場版　ゆうとくんがいく
ストーリー:セリエAのインテル・ミラノで活躍するサッカー選手・長友佑都が監修を手がけ、自身をモデルにしたキャラクター、ゆうとくんの成長をコミカルに描いたショートアニメ「ゆうとくんがいく」の劇場版。イタリアのプロチームに所属するゆうとの前に、強力なライバルが出現。さらなる成長を求めて修行の旅に出たゆうとは、レジェンドと呼ばれる伝説のサッカー選手による指導を熱望する。ところが、なぜか地元在住の不思議な老人からサッカー指導を受けるハメになり・・・・。
上映時間:53分
監修:長友佑都
監督:ヒグチリョウ、太田和彩



～クメール語吹替え版ができるまで～

STEP1　翻訳
制作会社様よりお借りした台本を元に、カンボジア人の翻訳者にカンボジア現地の言葉であるクメール語に翻訳していただきます。

STEP2　吹替え
カンボジア現地のスタジオにクメール語版台本と複製を防止した映画のディスクを送り、声優さんにクメール語に吹き替えていただきます。

STEP3　ポストプロダクション
カンボジア現地から戻ってきた音声を日本でミキシングします。（協力：アクシー株式会社様）

完成！子どもたちはどんな反応で映画を観るのでしょうか。楽しみです！
※『劇場版 ゆうとくんがいく』の上映会は、2015年度に実施いたしました。

日本でのCATiCの活動

CATiCは都内にてミーティングを行い、イベントなどを行っています。活動の一つに「ブック・トゥ・ザ・フューチャー」があります。

ブック・トゥ・ザ・フューチャーはCATiCと株式会社浩仁堂様とが協同で行っている古本買取りプロジェクトです。「古本を映画に変えてカンボジアの子どもたちへ」をコンセプトに、ご家庭や学校、職場などで集めていただいた本を浩仁堂様にお売りいただき、引き取り額をCATiCにご寄付いただくという仕組みです。

株式浩仁堂様は、主にインターネットで売買する東京・武蔵野市のネット古書店です。「精神障害者が普通に雇用される状態を作り出すこと」を使命として、統合失調症やうつ病などの精神障害を持つ人たちや、発達障害の人たちの雇用を推進しています。こうした社会的な活動の経験からCATiCの活動にも賛同、当プロジェクトが実現しました。
2014年度は、38冊の本の買い取りがなされ、5650円の寄付が集まりました（お値段のつかなかった本を合わせると4～5倍の本が集まっています）。ご協力に心より感謝申し上げます。

～株式会社浩仁堂　代表取締役　直志浩仁様よりメッセージ～

「映画を作る」という少女の夢は大人になった頃あきらめてしまいました。夢を諦めた彼女は派遣社員として働く中で心も体もぼろぼろになりました。どん底まで落ちた時「カンボジアの子どもたちに映画をとどけたい。その映画を見ることで将来に夢を持って欲しい」と考えました。彼女の夢は彼女に思いもかけない力を与え、多くの優秀な若者、共感した大人たちを集めました。そして、夢アワードという舞台で彼女のプレゼンは日本一になりました。夢の力が奇跡を起こしたのです。映画にかける夢が、映画の様な、夢の様な現実を引き起こしました。夢の配達人教来石さんの夢が日本の若者たちの力を引き出し、カンボジアの子どもたちに夢を届けています。その1歩1歩が「夢は叶う」という実感を私達にもたらし、また私達を力づけ、夢へさらに近づけます。CATiCがまいた夢のタネが満開になるのを見たい。それがまた、私達の夢になります。そう私達は教来石さんが結んでくれた夢の仲間なのです。

直志様プロフィール
福祉施設職員として15年の勤務の後、障害者雇用を実現するために8年前にネット古本屋浩仁堂を起業した。CATiCと共同でブック・トゥ・ザ・フューチャーのプロジェクトをすすめている。

ブック・トゥ・ザ・フューチャーにご協力いただいている企業・団体様
●合同会社吉祥寺フランス語学院
●EDITORY神保町

1. 活動計算書(2014/24～2015/3/31)

(単位：円)

科　目	金　額		
Ⅰ　経常収益			
1.　受取会費			
正会員受取会費	0	0	
2.　受取寄付金			
受取寄付金	287,766	287,766	
3.　受取助成金等			
受取助成金	50,000	50,000	
4.　その他収益			
受取利息	12		
雑収	200	212	
経常収益計			337,978
Ⅱ　経常費用			
1.　事業費			
(1)人件費			
人件費計	0		
(2)その他経費			
会議費	7,700		
諸経費	6,000		
業務委託費	60,890		
通信運搬費	1,088		
支払手数料	7,779		
その他経費計	83,457		
事業費計		83,457	
2.　管理費			
(1)人件費			
人件費計	0		
(2)その他経費			
その他経費計	0		
管理費計		0	
経常費用計			83,457
当期正味財産増減額			254,521
前期繰越正味財産額			0
次期繰越正味財産額			254,521

2. 貸借対照表(2015/3/31現在)

(単位：円)

科　目	金　額		
Ⅰ　資産の部			
1.　流動資産			
現金預金	239,921		
立替金	30,000		
流動資産合計		269,921	
2.　固定資産			
固定資産合計		0	
資産合計			269,921
Ⅱ　負債の部			
1.　流動負債			
未払金	7,700		337,978
預り金	7,700		
流動負債合計		15,400	
2.　固定負債			
固定負債合計		0	
負債合計			154,000
Ⅲ　正味財産の部			
前期繰越正味財産		0	
当期正味財産増減額		254,521	
正味財産合計			254,521
負債及び正味財産合計			269,921

CATiCを支えてくださった皆様

2014年度にCATiCを支えてくださった企業の皆様（敬称略・順不同）

株式会社新日本映画社

株式会社オーエス

アクシー株式会社

株式会社リコー

株式会社白組

株式会社バリュープレス

株式会社浩仁堂

合同会社吉祥寺フランス語学院

公益財団法人東京コミュニティー財団・ファンドクリエーション基金

2014年度個人会員の皆様（敬称略・順不同）

筑井　康敏

宮澤　宏

芳賀　大輝

土屋　あまね

Create
A
Theater
in
Cambodia

The happy ending we imagine, or our mission is "to make a world where all children can carve their own lives with dreams regardless of any backgrounds".

特定非営利活動法人CATiC（キャティック）
HP：http://www.catic.asia/
Facebook：https://www.facebook.com/t.cambodia
Twitter:https://twitter.com/catic0901
Email：info@catic.asia

銀行口座
みずほ銀行　世田谷支店（支店番号：212）
普通　1421847
ヒエイリダンタイ　CATIC

郵便口座
郵便振替　10580-40736631
トクヒ）キャティック
【店名】〇五八
【店番】058
【預金種目】普通預金
【口座番号】4073663